令和６年度島根県立大学短期大学部
一般選抜
保育学科　小論文問題

【問題】

次の文章は、「ぐりとぐら」の作者である中川李枝子さんのインタビュー記事である。将来保育者となるあなたが、この記事に書かれている「保育士が「幸せ」だと思って働ける環境」について考えたことを、ふさわしい題名をつけて 800 字以内で論述せよ。

絵本「ぐりとぐら」の作者・中川李枝子さん（87）は、本を書きながら保育士（保母）としても働いていました。子どもと向き合った日々を「楽しかった」と振り返る中川さん。保育士による不適切な保育が各地で相次いでいることに、「保育士が『楽しい』と思えない現場があるとしたら、とても悲しい」と胸を痛めています。

――「ぐりとぐら」を書いたときは、保育園で働いていたそうですね。

はい。都立高等保母学院を卒業してすぐの 20 歳のころ、東京の駒沢にある無認可のみどり保育園に就職しました。近所に住む 30 人くらいの子どもたちが通ってくる、そんな保育園です。

「求む　主任保母」という貼り紙にひかれてね。学院を卒業したてでしたが、「日本一の保育士になるぞ」って、応募したのです。

広い原っぱと青空。そんなすばらしい環境の保育園でした。

――保育園で働く日々はいかがでしたか。

私は、保育の仕事が大好きでした。好きで入った仕事だから、毎日楽しかったですよ。

園長先生からはただ一つ、「子どもたちが毎日喜んで通ってくる、一人も欠席のない保育をしてください」と言われていました。私もそれを目指して働きました。

子どもたちみんなが「楽しい」と通ってくれる園を作りたくて。卒園するときに、「一日も、保育園がいやだと思ったことがなかったなぁ」って言った子がいて、うれしかったですよ。

今日はなにをして遊ぼうかな、と考えながら、毎日保育園に通っていました。

あるとき、父に「園長先生にお給料をもらっては悪いよ。おまえも、保育料を払ったらいいのではないか」なんて言われてね。それくらい、私が保育園のことを楽しげに話していたのでしょう。

――大変だったことにはどんなことがありましたか。

子どもを相手にする保育は真剣勝負。常に厳しい仕事でしたよ。

戦後に宣言された児童憲章では、児童は「人として尊ばれる」「社会の一員として重んぜられる」「よい環境のなかで育てられる」とあります。また「すべての児童は、心身ともに健やかにうまれ、育てられ、その生活を保障される」ともあります。これらを守っていくことは、生半可なことではありません。

子どもと真正面から向き合っていたので、もちろん、子どもとけんかをすることもありました。でも、いいけんかというのは、いままで以上に仲良くなるものなんですよ。

――当時は無認可の園だったそうですね。運営面での苦労などはありましたか。

お金のない保育園だったけれど、その分、保育士としての腕の見せどころもたくさんありました。

紙芝居がなければ、自分で絵本を画用紙に写し、紙芝居に仕立てました。工夫次第で、なんでもおもちゃにできました。

あるとき、積み木にとっても興味を持った男の子がいてね。その子のために園長先生が借金をして大型の積み木を買って下さって。その子は、立派な建築家になりました。そんな可能性の芽を広げられるのも、保育園のいいところだと思います。

――最近、保育現場での虐待など、悲しいニュースが続いています。「仕事がつらい」と思う保育士も多いようです。

虐待があったり、置き去りにされてしまったり……。私には考えられないことです。

でも、子どもとふれあう保育の仕事を「楽しい」と感じられない保育士がいるのだとしたら、それはとてもつらい、かわいそうな話だと思います。

保育の仕事は、とっても素敵な仕事です。子どもたちが可愛くて可愛くて、「このままさらっちゃいたいわ」なんて、よく思ったくらいです。

もちろん、子どもはお母さんが一番好きだから、どんなに尽くしても勝てないのですけれど。

私が働いていた園は、園長先生の理解もあって、好きなように「保育」を追求できたのも、幸せだったのかもしれません。

可愛い子どもたちと過ごしたあの時間のことは、いまでも思い出せます。「ぐりとぐら」も、「いやいやえん」も、保育園で働くなかで生まれた本です。

子どもと関わる以上は、保育士の質はもちろん大切です。教育をきちんとしてもらわなければ困ります。

そのうえで、保育士が「幸せ」だと思って働ける環境になっているのかどうか。それも、気にしてほしいなと思います。

出典：中井なつみ（聞き手）「保育士は楽しく厳しい素敵な仕事　「ぐりとぐら」作者・中川李枝子さん、保母時代を語る」『朝日新聞』2023 年２月６日掲載（一部改変）